

社会福祉の根本問題に関する一考察

—加害者性論の視点から—

○ 東北福祉大学 感性福祉研究所 小川 和也 (9201)

田中 治和 (東北福祉大学・0116)

キーワード：福祉実践・非対称的關係・加害者性

1. 研究目的

本研究では社会福祉（主に福祉実践）の加害者性について着目する。福祉実践は援助・支援する側と受ける側の相互が関連して展開される。メイヤロフ(1987:13)はケアを「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである」と述べる。しかし、斉藤(2013:9)は「あらゆる人間関係には、あらかじめ支配-被支配のエレメントが含まれており、それはつねに暴力の萌芽たりうる」と指摘する。また、秋山(2000:344)は「社会福祉の関係者が、相手を援助するように見せかけながら実は傷をつけているという状況は多くある」と述べる。これらの見解から、援助・支援する者が対象者を傷つける可能性を内包していることがわかる。

しかしながら、福祉実践の加害者性についての研究は多く見受けられない現状にある。そのため、本研究は、福祉実践の加害者性(非対称性・支配性・暴力性・権力性・抑圧性を含む)に関する基礎的な研究として、これまでの福祉実践における加害者性についての言説の整理・分析を目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究の出立点は、自分自身が援助を受ける側となった経験にある。援助することを生業とする専門職の言動から救われることもあったが、不安や痛みを伴う場面も存在した。援助者の働きかけが常に対象者にとって最善であるとは限らない。

そのため、本研究では、援助・支援する者が自己の加害者性を自覚することが、被援助者との非対称的な関係性の緩和に繋がるという仮説に立ち、福祉実践における加害者性に関連する先行研究・文献を整理し、福祉実践に内在する加害者性の特性を抽出していく。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に従い、引用・参考文献等を厳密に明記するなどの倫理的配慮を行った。

4. 研究結果

細田(2011:66-68)は、うつ病患者である。関わったソーシャルワーカーの対応について、「ざらついた嫌な気持ちは今もこころを離れることがありません。一中略—いやそれ以上に侮辱を受けたような気がしました」と述べ、当事者が実際に傷ついた経験を記す。

菊地(1973:139-146)は、社会福祉が専門家として社会的国家の内に位置付けられることで、対象に対する関係が見失われる点と思想と実生活のいきずまりを取り上げ、社会福祉の差別機能を述べる。

窪田(2009: 225)は援助の両義性として支配力を挙げており、三好(1997: 266)は、「自分は人の役に立ついい仕事をしており、ヒューマニストであると思い込んでいる心理状態を“メサイヤ(救済)・コンプレックス”と言う」と指摘する。

秋山(2005: 344-349)は、社会福祉の援助者が解決困難な問題に直面した際の、「立ち尽くす実践・逃げない姿勢」を説く。しかし、稲沢(2002: 190-191)は、「援助者は苦しみを背負わされている人を前にしても逃げ出すことができる。これこそが、援助関係に伴う非対称性を根源的に形成している」と述べる。

信田(1999: 72)は「無力さを開示することは謙虚にみえて、実は専門家の自己保身かもしれないが。」と無力さを自覚する姿勢にも懐疑的な見解を示す。

六車(2012: 222)は、介護関係において民俗学的な聞き書きが非対称性を解放・逆転させると考えながらも、「内包される暴力性から完全に免れることは不可能である」と述べる。

5. 考察

上記の内容から、福祉実践には加害者性が内包されることがわかる。また、無力さを自覚・主張したとしても加害者性は解消されない。徳永(2011: 175)は医療者と患者の関係を、「ただ互いに学び合うって言葉はきれい過ぎるといふか、互いに傷をつけ合っているのではないのでしょうか」と述べる。また、安積(1999: 88)は専門職の傲慢・権威主義的な態度を批判するが、「まず協力を謙虚に求める」という専門職の基本的な姿勢も提示する。福祉実践の場も医療と同じく互いに傷つけ合う関係であり、単なる学び合いではない。非対称性を鑑みると支援する側の加害性が強いと考えられる。自らの加害者性を自覚することこそが、支援する側が持つべき謙虚さの一つと言えるのではないだろうか。

文献(当日、詳細な文献リスト含めレジュメを配布する。)

秋山智久(2000)『社会福祉実践論』 ミネルヴァ書房

安積遊歩(1999)「障害当事者からみた専門職」『季刊福祉労働 84号』 現代書館

細田一憲(2011)『正常から少し離れた場所において「精神障害」の“患者学”を問う』 あいり出版

稲沢公一(2002)「第3章援助者は「友人」たりうるのか - 援助関係の非対称性」『援助するということ』

古川孝順・岩崎晋也・稲沢公一・児島亜紀子編 有斐閣

菊地直明(1973)「社会福祉における課題」『東北福祉大学論叢第十二巻』 東北福祉大学

窪田暁子(2009)『長野大学紀要特別号第1号—社会福祉の臨床研究—その意義と可能性』 長野大学

ミルトン・メイヤロフ著；田村真，向野宣之訳(1987)『ケアの本質：生きることの意味』 ゆみる出版

三好春樹(1997)『関係障害論』 雲母書房

六車由美(2012)『驚きの介護民俗学』 生活書院

信田さよ子(1999)『アディクションアプローチ もうひとつの家族援助論』 医学書院

斉藤環(2013)「特別特集 暴力の心理」『こころの科学 172号』 日本評論社

田中治和(2013)「社会福祉の「対象論」再考」『東北福祉大学研究紀要第37巻』 東北福祉大学

徳永進(2011)「医療の現場から - 聞き続けてきた人びとの言葉」『人間といういのちの相IV』 東本願寺出版部